ヲト4G-24

特274

539

阿尾鄉土讀本

全

阿尾尋常高等小學校

始

特 2 54

阿尾鄉

土讀本

全

阿尾尋常高等小學校

昭和十二年 第本 帝國 74

はしがき

一、鄉土の山川草木は兒童の精神生活の搖籃であります。

二、鄉村を愛する心はやがて皇國を思慕する情念となります。

三、鄉呂を學び進んで鄉土の發展に寄與されたいと念じます。

四、阿尾村を中心とした地歷産業宗教詩歌などをとりいれました。

五、尋常五六年の補充讀物として取扱ひたいと思ひます。

目録

第一　阿尾村……一
第二　榊葉乎布神社……三
第三　朝日山……六
第四　布勢の湖……七
第五　箭代神社……九
第六　鮎綱……一三
第七　唐島……一四
第八　灘浦……一七
第九　立山……一九
第一〇　淺野総一郎……二三
第一一　森寺のお宮……二七
第一二　二宮先生の銅像……二九
第一三　石動山……三三
第一四　お寺詣り……三六
第一五　鰯綱……三八
第一六　森寺城……四〇
第一七　上日寺……四三
第一八　戰死軍人……四五
第一九　氷見……四七
第二〇　森寺の西念寺……五〇
第二一　朝日貝塚……五二
第二二　阿尾城……五四
第二三　虻ヶ島……五六
第二四　鰤大敷網……五九
第二五　祇園祭……六三
第二六　殖林……六六
第二七　有磯海……六九
第二八　大境洞窟……七三
第二九　天満宮……七六
第三〇　二上山……七九
第三一　大澤路青峠……八一
第三二　荒山……八四
第三三　産業組合……八七
第三四　俳句と和歌……八九
第三五　國泰寺……九一
第三六　齋藤彌九郎……九四
第三七　氷見町……九九
第三八　我等の學校……一〇三
第三九　郷土の人物……一〇六
第四〇　郷土の發展……一〇九

戸數

阿尾	一七三
北八代	五四
森寺	四七
指崎	七三
計	三四七

第一　阿尾村

阿尾村は氷見郡の中央に位する山紫水明の地である。氷見町をはなれて稻積新道から灘浦一帶の山々を眺めると、新緑の木芽をわたる風もさわやかに見るからに生々する。眼を轉じて有磯の海を見渡せは油のやうな春の海にかもめの鳴く聲もやさしく、つゞくかぎりの空や海、海や空なる青海原である。山も青く海も青く又空も青い。この天地一碧の青青とした感じがやがてわが阿尾村の名をつけた所以である。即ち阿尾は青に通ずる。阿尾村は面積凡そ一方里戸數三百五十戸人口二千四百人を算する。阿尾、森寺、指崎、北八代の四

水田
三、二四八反

（阿尾浦）

つの部落に別れ人情に厚く共同の精神も強くて、まことに平和な村である。主として農業に従事して居るが米の年産額は三千七百石に達し毎年二千石あまりは村外へ移出してゐる。海岸の人々は漁業に従事し春夏秋三度の網を通じて漁獲高は凡そ十五萬圓に達してゐる。青年は遠く福井縣三重縣新潟縣や朝鮮カムチヤツカ等に出稼するものが多い

のでそれ等の收獲も相當の額に達する。

我が阿尾村は山あり海あり風光明媚で天産も豐かなまことに住み心地のよい村である。これは一に天惠にもよるのであるが又幾千年以前からこの村に生れて村の開發に努力をして下された祖先の賜である。吾等はこの有難い村に生れ合した幸福をよろこび更に將來の發展に努めねばならない。

第二　榊葉乎布神社

四月十五日は阿尾村の祭である。太鼓の音に心をおどらせてお宮へ詣る。お宮の前では囃子もにぎやかに獅子舞が

（榊葉乎布神社）

舞ふてゐる。鎭守の森には、二かかえにあまるやうな欅の木が、やわらかな木の芽をふいてすがすがしい青空が見える。茂る森の木かげには椿の花がぱつちりと可あい、目を開いて笑つてゐる。やがて白い素袍を着た神主さんが、石壇を登つて來られた。つゞいて紋付の羽織を着た村の人達も、ぽつぽつお宮へ參詣さるる。しばらくすると、お宮の中でお神

菊地武勝は武光七代の孫なり

樂があがつた。新しい太鼓の音は海を越え田を越えて村中へ響きわたる。何となく神々しい感に打たれた。昔阿尾城主菊地武勝が九州から東上の途中家運の長久を祈るために伊勢の皇大神宮へ參拜して榊の一枝を貰ひ受けこれを持つて歸つて阿尾の城に移し植えた所、根を生へ枝を生へよく繁茂したといふのである。この榊を御神木として城主の守神としたので、お社は榊葉神社と申し御祭神は天照大神をお祀りしてある。

御輿堂の前から左の石壇をのぼると白峰神社がある。これは四國の琴平宮と同じく崇德上皇を祀つてあるので海の守り神である。

第三　朝日山

海を距てゝはるかに見える朝日山は氷見名所の一つである。春夏秋冬何れの眺めもよいが櫻の花の朝日山は又一しほの趣きがある。松の緑の間に點々と花をちりばめた景色はさながらに一幅の繪卷物である。

山頂に神武天皇の銅像がある。明治四十一年大正天皇がまだ東宮殿下にましました頃行啓紀念として建てられたのである。銅像の臺に刻んだ永芳の二字は乃木大將の書かれたもので朝日山公園のことを一に永芳公園ともいふ。太平洋の方面では海から昇る朝日を見ることは、めづらしくない

が日本海の方面で海から昇る朝日を見ることの出來るのは僅かにこの朝日山あたりからだけである。故に朝日山は裏日本に於ける朝日の見所といふわけである。赫々と輝き昇る海上の旭日は日本人の心を表象するに應はしい。

明治天皇御製

さし昇る朝日の如くさわやかに
もたまほしきは心なりけり

第四　布勢の湖

蒼海變じて桑田となるといふが、古の布勢の湖は今の布勢村、十二町村、神代村に亙る廣々とした湖水であつた。

國司大伴家持卿は都をあとに遙々とこの邊陬の地にとゞまり、折にふれ伴人をつれ布勢の湖に舟をうかべて風雅の遊びを忘れなかつた。

布勢の海の有磯によする白浪の
かさしにほふ春の浦ふち

布勢の圓山は當時湖水の中にあつた一つの島であつたといふのである。今この丘に登つてあたりの景色を眺めるに一千年の昔、國司の一行が遊覽された情景が髣髴として眼前に現はれて來る。こゝに布勢神社あり、松杉天に聳えて春の花、秋の紅葉と四季のながめもよい。別に御影社あり家持卿を祀つてある。又明治三十三年地方の有志相計りて家持卿

の一千百年祭を行ひ記念の銅碑を建てゝ卿の遺德を不朽に表はされたのである。

圓山の西を流るゝ小川にさゝやかな橋がかけてある。この橋こそは有名なかさゝぎの橋の名殘である。

かさゝぎのわたせる橋におく霜の
白きを見れば夜ぞふけにける

第五　箭代神社

今日は箭代神社のお祭である。縣から奉幣使がお詣りになり中學校女學校の生徒も參詣する。延喜式内八代庄二十箇村の總社で明治五年に鄕内で最も由緒があるお宮である

（箭代神社）

といふので鄉社に列し昭和五年更に昇格して縣社に列したのである。

祭神は神功皇后が三韓を征伐された時に扈從した忠臣武内宿禰の子葛城襲津彦命を祀つてある。命は人皇第十五代應神天皇の御代に唐の國へ使して歸り越中國射水鄉を治められたのであるが弓箭の道に著しい名があつたので箭代の神としてお祀した

のである。

このお宮の北の方に今は田畑に變じてゐるが的場と稱する所がある。按ずるにこの地に一大的場を設けて武道を奬められた名殘をとゞめるものであらう。社殿の後方の丘陵、中山といふ所は舊社地で村民は一般に靈地としてゐる。日露戰爭の記念に櫻を植ゑ花の頃には見事である。

祭神の御女磐之媛は入りて仁德皇后となり給ひ履仲天皇反正天皇允恭天皇の御三代は悉く仁德皇后の生せ給ひし皇子である。かくてわが村と御皇室と深き緣りのあることを思ひ鄉土の誇りを禁ずることが出來ない。

第六　鮪網

一統の網に六艘の胴船がつながつて靜かに休んで居る。船の上に苫屋をつくつてすや〳〵眠つてゐる者もあれば日なたに出て書物を讀んでゐる青年もある。

高さ四米もある魚見やぐらの上には船頭か一分のすきもなく鮪の樣子を見張つて居る。

「敷けよー　敷けよー」

といふ一聲に六艘の船の漁夫は總動員である。忽ち仕度を整へて各々持場に着く。その一絲亂れぬ統制は、さながら隊長の命令一下敵陣におどり込む軍隊の動作とかわらない。

船は一列に並んだ漁夫は皆裸になつて向ふ鉢卷の勇しい姿である。

「よいしょー　よいしょー」

の掛聲も勇ましく次第々々に網を揚げられていく。やがて大きな鮪の姿が右往左往かすかに青い潮の中に見えて來る。

「おるぞー　おるぞー」

だれいふとなく喜びの聲が聞えて來る。網は次第に取りつめられて鮪はいよ〳〵逃げ場を失ふ。その時を外さず漁夫の一人は三米に餘る鈎を持つて鮪の頭をひきかけ船端近くかき寄せる。鮪はいよ〳〵猛り狂ふて尾を振り鰭を躍らせる。漁夫は鮪の頭部を目がけて大きな鐵槌を振り上げ打ちたゝ

く。け上げる水煙、流るゝ血潮はたちまちに一面の海を紅に染め、さながら戰場のやうである。

鮪うつしぶきに勇む裸かな　　秋石

第七　唐島

雪島の岩ほに生ふるなでしこは
ちよにさかぬか君がかざしに　　大伴家持

唐島はもと雪島と稱したのである。この島に辨才天を祀つてある。五月三日は島のお祭で氷見浦一帶の人々は小舟を浮かべて島遊びをする。島の南側へ廻ると弘法大師爪彫りの地藏といふのがある。大師が北國へ御廻りの途中唐島へ

（唐島）

足をとゞめられ自然の岩に爪で地藏尊を彫られたのであると云ひ、一に火燈し地藏とも申すので、やがて海が荒れさうになると地藏さんの前に燈火が灯るゝといふ。漁師はこの燈火を見て家路を急ぎ海難をよけるといふあらたかな地藏尊である。この島にはまだ〳〵面白い傳說がある。

昔氷見町光禪寺の大智和尙が或日おもてを見ると大風が吹き狂

ふて黄塵を吹き立てゝゐる。これは唐國の大火に相違ないといふので小僧にお寺のめぐりに水をまかせた所不思議にもその大風が靜まつたといふのである。ところがしばらくすると唐の國から態々使をよこして和尚の奇智によつて唐の國の大火が難なく靜まつた。まことに有難いといふので、そのお禮に綠の小島を氷見の海まで持つて來たといふのである。故に唐島といふ。思ふに大智和尚が唐土に遊學し元德二年(紀元一九九〇年)に歸朝されてから、この島にしばらく參籠されたことがある。唐から歸つた人が居る島といふ事から唐島と稱する樣になつたのであらう。

夏季になると茶亭を開いて客を呼んでゐる。夕もやにつ

つまれた石動山の山脈、朝日山に連なる二上の山嶺、一葦帶水の間に連る氷見の港町、その間を往き交ふ汽艇の數々、涼風徐ろに來つて風光の名殘はつきぬ。陸から眺める唐島もよいが、島から望む山々の景は又一しほである。

幾時雨しても外れし島一つ　湘月

涼しさや島へさしゆく夕鴉　同

第八　灘浦

阿尾以北の海岸を灘浦と稱してゐる。入りては浦をなし出て、は崎をなし次々に展開する眺望の變化はさながらパノラマを見るやうである。藪田村は古は藪波の里と稱し萬

島尾三郎
湘月と號す

葉の歌に出てゐる垂姫の崎といふのがある。

垂姫の浦を漕ぎつゝけふの日は
たのしくあそべいひつきにせん

宇波はその昔鵜並といつたので宇波川の川口に鵜がたくさん並んで居たと傳へられてゐる。小境に大榮寺といふお寺がある。少し離れた所に髪塚といふのがあつて元弘年中後醍醐天皇の第十六皇子恒性親王がお年八歳の時に京都の兵亂をさけてこの地にのがれ僧となつて髪を埋められたものと傳へられてゐる。女良はもと女浪と書き男波女浪の打ちては寄せ寄せては碎く意を表はしたのであるといふ。

この灘浦一帶の地は石動山脈が有磯の海に踊り込んで斷

崖絶壁をなし海には岩礁が多くて海草が繁茂し海も亦割合に深い、然かのみならずリマン海流と日本海流の暖寒二流が入り込んで魚族の棲息する所としては自然に惠まれた理想の地である。この天惠に浴して灘浦の漁場が發達して來たのである。定置漁場としては實に全國稀に見る所であつて、こゝに至るまでに幾多の人々が研究に研究を重ね人知れぬ犧牲を拂つて今日に至つた事を思へば感謝の念を禁ずることが出來ない。

第九　立山

朝起きて濱邊に立てば青空高く立山の雄姿が海の彼方に

（立山頂上）

聳えてゐる。頂きの白い雪、彌陀ケ原の傾斜面、劍山のけはしい姿、手に取る樣に見える。駿河の富士山、加賀の白山、越中の立山と並び稱せられた我が國の名山で越中に生れたものは一生に一度は山に登つて山靈の雄大に接しなければならぬ。

有磯の海を隔てゝ眞一文字に日本アルプスの連峰を眺めるこの壯大の景は他に又と見られな

い。朝の立山もよいが、全山白皚々の一色につゝまれてさながら石膏細工の樣に見える雪の立山に暮色蒼然と迫つて薄紅に紫に暮れ行く山の姿は又一入壯嚴な感に打たれる。

立山の空に聳ゆる雄々しさに
ならへとぞ思ふ御代の姿も

今この御製を拜するにげにや大御心の程かしこい極である。越中人は古來勤儉力行の精神に富み堅忍不拔の心も強いといはれてゐるが朝夕に眺めるこの壯麗な自然に感化された力も少くないと思ふ。やがて登山のシーズンも過ぎればゝ爽かな秋の空に峨々として天を摩す劍山の山巔は既に雪を迎へて見るからにもの凄い。

高澤瑞穂は箭代神社の社司

藪田村に淺野翁誕生の屋敷あり

立山の劒が岳はさやかにも
ときてするどき秋の夜の月　　瑞穂

第十　淺野総一郎

兩國の橋の袂で

「サア冷つこい〳〵一杯一錢！」

と道行く人を呼んでゐる氷屋が居る。この青年は誰あらう。藪田村が生んだ一代の豪商淺野総一郎である。総一郎は嘉永元年三月に生れ、父恭順はお醫者さんであつた。総一郎も十四の時に父の代診に出たことがあつたが、或年コレラが流行したので、醫者なんかすつかり厭になつて他の商賣を始めるやうになつた。

初めは醤油の釀造をやつたり、稻扱の販賣をやつたりして居たがなか〳〵うまく行かない。二十二歳の頃氷見町に淺野商店の看板を出して、莫蓙商を開いて見たが失敗に終つた。

二十四歳の時僅かな旅金を懷にして、大志を抱いて江戸を目ざして、なつかしい郷里を去つたのである。

論語に「天の將に大任をこの人に降さんとするや必ず先づその心身を苦しめる」といふ言葉があるが、東京へ出た青年総一郎は決して安樂な生活を許されなかつた。夏は氷屋を始め、秋風の吹く頃になると、朝は四時に起きて自分で飯を炊き、六時になると竹皮を擔ついで、魚市場へ賣りに出かけた。か

くして、二十七歳の時は横濱で相當の財産を造り上げて喜んで居たのだが、「好事魔多し」といふ例に漏れず大火に遭ひ一朝にして全財産を灰にして仕舞つた。

しかし、これ位の事で比古垂るゝ樣な総一郎ではない。明治十二年三十二歳の時深川のセメント製造所が經濟がもてなくなつて、閉鎖されてしまつたのを見て大變殘念に思ひ、政府に代つて獨力でこの國家的の事業を、引きうけやうと決心して、熱心に希望を述べて貸下をうけ、毎朝五時になると、自から工場の入口で、職工の來るを待ち受け、職工が揃ふと一緒になつて働いた。それから、次々と有利な事業に目をつけ、岩崎汽船部と共同して、運送事業に着手したのが、今日の日本郵船會社である。日清戰爭の時など、汽船を全部提供して御用船となし大いに國家の爲に盡した。

四十九歳の時、世界的海運業に志して、東洋汽船會社を創立し全力をこの事業に捧げて、巨萬の富をつくり東都に於ける、押しも押されぬ財界の重鎭となつたのである。

思へば兩國の橋の袂で、一杯一錢の氷水を賣つてからこの方、五十年の奮鬪の歴史はたゞ勤勞の生活によつて富をなし、國家に盡すといふ一念に外なかつたのである。

翁は常に人に示して

「稼ぐに追ひつく貧乏なし」の一言を以つてされてゐる。七十三の時、社會奉仕の念に促され、實際に役立つ教育を施すた

めに、横濱に綜合中學校といふ新しい學校を建てられ又新湊の商船學校が存廢の岐路に立つた時、その維持費として拾萬圓の巨費を提供された。東洋一を誇る庄川ダムの如きも淺野翁の努力によるものである。

大正十年安田善次郎翁と共に、大洋丸に乘つて歐洲へ出かけ大戰後の沈退した工業界を、如何にして救はうやといふ大きな國家的の希望を抱いて、二人が色々と話し合ひ、先進工業國を學ばんとしたのであつた。然るに昭和五年落葉の秋、八十二歳を以て大事業家財界の偉人の奮鬪史の頁を閉ぢられたのである。

安田翁は富山市の出身なり

第十一　森寺のお宮

今日は森寺の愛宕神社の境内で、青年相撲があるといふので見物の人が續く。松・杉など鬱蒼と生ひ茂つた、鎭守の森の中に、相撲場をこしらへて、大勢の人が集つてゐる。素裸になつた、力士は見るからに立派な體格をしてゐる。行司は双方の名を呼んで、軍配團扇を一寸とひくと二人はむんずと取組んで仲々勝負がつきさうもない。

相撲は國技といはるゝ樣に、我が國特有の運動で、まる裸になり全身の力を打ち込んで勝負を決するので、見物人は手に汗を握つて、はら〳〵する。老も若きも氏神さまの境内で、樂

しさうに語り合ひ、自分の村から選び出された力士が勝つか負けるかと片唾をのんでその技に見とれてゐる。味方の選手が勝ち上ると贔負の人々は熱狂せんばかりに歡聲を上げて、山も搖がすほどである。

愛宕神社は、伊佐那岐尊の御子加倶土命をお祀りしてある命は火の神さまである。火はまことに大切なものであるが、一度火を取り損ふやうなことがあると、神の崇りをうけて、野も山も一たまりもなく燒け野ケ原になつて仕舞ふことがある。

やがて相撲が終ると、關取は大勢の人々にかつがれてわいしよ〳〵とお宮の壇を登り氏神樣へお詣りする。この相撲

は吾が國民性にぴつたりした競技で、氏神樣の境内で神人一體の境地になつて、一日の樂しみをするといふ習はしには、まことによいところがある。

夕日が西の山に傾く頃見物の人々は蜘蛛の子を散らした樣に四方へ散らばつて行つた。

第十二　二宮先生の銅像

朝學校に來て奉安殿に拜禮すると、すぐ二宮先生の銅像が目につく。脊中には薪を脊負ひ、歩きながら書物を讀まる、像である。貧しい家に生れて、幼い時に兩親を失ひ、苦しみの中にもよく勉强された先生はほんとうに偉い人であつたと

思ふ。

二宮先生の歌に

世の中は寶つみおく無盡藏
鍬でほりとれ鎌でかりとれ

（二宮先生の銅像）

といふのがある。先生は常に天地の御德に報へることを訓へられ、何事をするにも至誠を以つて勤勞をなし、各自の生活に、分度を守つたならば、必

ず幸福な生活が出來ると敎へられた。貧しい百姓家に生れた先生ではあつたが、今は神さまとなり、靜岡縣小田原に縣社二宮神社として、祀られてゐる。

銅像の臺石の前面には、二宮先生幼時の像といふ、時の總理大臣齋藤實の書かれた、銅版がはめてある。又裏面には「好キナ事ナラ一日延ハセ」といふ言葉を彫りこんである。面白い言葉であると思ふ。人は皆自分の好きな事におぼれ、まま身を滅すやうな事がある。好きこそものゝ上手なれといふ俚もあるが、これは各その性能に應じて、特質を發揮せよといふ積極的の敎へである。好きな事なら一日延ばせといふのはその半面の眞理を傳へたもの、快樂主義を戒めた言葉で

あると思ふ。二宮先生の如きは、幼少の頃から寸時を惜んで刻苦されたので、快樂などに費さるゝ日は一日もなかつたわけである。

第十三　石動山

秋の遠足に石動山へ登つた。宇波川を逆つて白川戸津宮を越えると、もうそろ〳〵爪先登りの山路である。路の兩側には山紅葉が鮮かに色づいてゐる。途中で一休すると、雨晴から島尾の松原が手に取る樣に見え、眞近に唐島も小さく見えて帆かけ船の往來するのも、あちらこちらに點々と見える。この山は天平の昔勅願によつて、泰澄大師が建立されたもの

で七堂伽藍が天に聳え數千の僧坊並び建ち、加越能三ケ國を勸請する勅許まで與へられてゐたので、隨分豪勢を極めてゐたものである。高野山の金剛峰寺・比叡山の延曆寺と相對して、石動山天平寺の名は廣く天下に知られてゐたものださうである。

然るに天正十年温井景隆が上杉景勝と相通じ、三百騎を率ひて天平寺に入り、僧兵と合して暴威を振ひ、荒山に堡を築いて一隊を屯させ、前田利家に抗するやうに至つたのである。利家は佐久間盛政に援けを求め、自からは二千五百の兵を率ひて石動山の攻略に向ひ、一山の僧兵と大いに戰ひ遂に天平寺を圍んで兵火を浴せたので僧坊悉く燒き盡されて、大宮坊

般若院等驍名を以つて知られた怪僧も山を落ちのびて四散する事となつた。

さすが殷盛を極めた靈山も兵燹のために一たまりもなく潰滅されて、昔を物語る槿花一朝の夢となつたが、天正十一年の冬に至つて、正親町天皇は利家に勅宣し、天平寺を再建せしめ給ふたので、利家は忽ち工を起し造營にあたり、十五年の歳月を費し慶長二年五社權現堂を始めとして五十八坊悉く成り舊態に復することを得たのである。その後明治の御代となつて神佛の混淆を禁ぜられ、一山の勢力も大いに衰ひ、法衣を脱いて神官に替るものもあれば僧坊を捨てゝ都に走るものも出でゝ、今は又昔の面影を偲ふべきよしもない。

山の中腹にホツ〳〵家が見える。こゝは石川縣鹿島郡の越路村である。少し小高い石壇を上ると伊須流岐比古神社がある。社殿はなか〳〵古い建物である。

寶物殿の中には五社權現や十八面觀音など、珍らしい社寶を藏してある。左に廻ると經堂や五重の塔などの基石が歴然と殘つて、當時の規模の大略を窺知することが出來て今昔の感に堪へない。頂上には小さな祠がある。四圍の眺望は絶佳で呼はゝ應へん能登の島山や、七尾の港に出入する船の數々、良川のあたりを今出たばかりの汽車はおもちやのやうに、小さく見え煙を吐いて走つてゐる。

第十四　お寺詣り

城山の麓に願生寺がある。眞宗大谷派のお寺で山門を潜れば大きな羅漢の木が聳えてゐる。日曜學校の子供等は手に手に珠數を持つてお寺に集つて來る。やがて正信偈を上げる聲がお堂の外に流れて聞える。昔阿尾の城主菊地武勝氏が遠く河内の國にあつた願得寺といふお寺をこの村に移し、菩提寺としたのであると傳へられてゐる。中古その寺は二ケ寺に分れ一は得生寺といひ一は願生寺と稱するやうになつたのであるといはれてゐる。

得生寺の樓門を潜ると銀杏の古木が高く天に冲してゐる。

大谷派（俗にお東といふ）
願生寺
覺照寺
西念寺

本願寺派（俗にお西といふ）
得生寺
淨福寺

風の吹いた朝子供等は群がり集つて銀杏の實を拾つてゐる。百年千年の後には朝日の大銀杏に負けない天下の名木となつてくるであらう。

北八代には淨福寺といふお寺がある。小高い坂を上り詰めると左手の方に、日露の戰役に爾靈山で名譽の戰死を遂げた船山淺次の石碑が建つてゐる。御拜の柱には、的淨日曜學校の標札が墨痕鮮かに掲げられてある。

後の方は山がかりのお庭で、躑躅の盛りはなか〳〵見事である。山を越えて指崎村へ出ると覺照寺がある。附近に長慶寺屋敷と稱する所があつて、今は畑地になつてゐるが昔は大きなお寺があつたと傳へられてゐる。森寺には西念寺と

いふお寺がある。連誓上人が開かれたといふ由緒のあるお寺で、郡内でもなか〳〵有名なお寺である。吾等の家は多くは村内五ヶ寺の門徒で祖先の遺牌を祀る廟所であるからこれを菩提寺といつてゐる。お寺と檀家とは親しみの深いもので、或は主従の關係であり、或は師弟の間柄でもあるといつてよい。

第十五　鰯網

（いわし・いわし　鰯・鰮　何れの字も用ゐる）

氷見鰮の名は、も早天下に響いてゐる。漁期になると船も鰮、車も鰮で到る處に銀鱗が光つてゐる。鰮網は毎年二月上旬に沈下するので、嚢網と垣網からなつてゐる大謀網である。

垣網は魚の通路をさえぎる大目の縄網で、魚を網に添ふて嚢の中へ誘ひ入れるやうな仕掛にしてある。

鰮は大群をなして水面を浮游する性質を持つてゐる。多くは鯨や、ゆりかのやうなもの、餌さとならうとして追はれることがある。

氷見浦にとれる鰯は、まいわし・かたくちいわし・うるめいわし、などの種類が多いが、その多くは水産加工品として味淋干・干鰮・目刺などとして食用に供するものと、〆粕として魚油をとり肥料にするものとがある。ゴマメと稱する鰯の稚魚を濫獲すると、將來鰯の漁獲高を減ずることになるから法令で禁止されてある。

氷見郡にとれる鰯の年産額は數十萬圓に上り之に製造加工したものを合すれば相當の産額になる。　鰮はひとり漁業家の收益となるばかりでなく、商人はもとより一般農家としても、底廉な肥料を供給されることになるから、すべての社會を濕すので鰮大獵の年は自ら氷見浦の人氣を湧きたゝせる所以である。

第十六　森寺城

森寺の鎭守の森を左に見て大橋を渡り、西念寺の前を通つて城山路をだん〳〵登れば、廣き山道開けて古の交通を偲ばる、。

森寺城は井山城或は湯山城などゝ稱せられてゐるが多くは地名によつて、森寺城といふ。　長澤筑前守の居城であると傳へられ、天正五年七月上杉謙信が有坂備中守に攻めさせてこの城を陷れ河田主膳に守らせたといふ。　城の大きさは本丸長さ十七間幅十間あり二の丸は長さ四十間幅二十八間あり、他に長さ七十間幅三間の馬場があつたといふのである。今この城跡は多くは畑地に變つてゐるが、本丸の大手先に高さ一間三尺長さ二十間餘りの石壘が殘つて居る。　内に徑三間深さ二十間許りの涸井が一つある。　又櫓臺の跡と見るやうな羽取石もあり、御殿屋敷と稱する所のあるのは城主邸宅の跡とも思はるゝ。　其他近くに大門、金堂、踏段堂、中段等の地

（上日寺）

名の殘るところを見れば、規模の概略を量り知ることが出來る。又本丸の西にあたつて寺坂屋敷・佐伊多屋敷・野崎屋敷など、稱する地名がある。これは當時の家老の屋敷であらうといはれてゐる。

第十七　上日寺

四月十八日は、朝日のごん〳〵祭である。上日寺へ詣る道の兩

側には、お菓子屋、おもちや屋などが立ち並んで、身動きも出來ない程の人出である。櫻の花は、今を盛りと咲きほこつて、北國一と稱せらるゝ大銀杏は、若芽をふいて、所居顔に大空に聳え立つてゐる。高い石壇をのぼりつめると、惠比須大黑の大きな人形を飾つてある。鐘樓には、村の青年達が生松の大木をかついで、こん〳〵祭の鐘を撞き競べてゐる。觀音堂には、昔、加納村の人が、太田の濱から拾ひ上げて來たと傳へられてゐる天竺月蓋長者の作になる千手觀世音菩薩を祀つてあるので、三十三年毎に御開帳がある。

この寺は白鳳十年の創建で、眞言宗である。正平年間には、七堂伽藍が備つて隨分立派なものであつたと云はれてゐる。

元龜年間、森寺城主長澤筑前守光國が、西國三十三ヶ所に擬して、觀音の石佛を安置したといふ。閻魔堂には、賽の河原で可愛い、子供達が、一尺積んでは父のため、二尺積んでは母のためと稱ひながら小石を積んで遊んでゐると、後の山から鬼が現はれて、積んだ小石を打ち破す繪や、恐ろしい地獄の苦しみを描いた繪がある。子供等はおそる〳〵覗いてゐる。

銀杏精舍の名に應はしい公孫樹は、本邦巨木の代表的のもので、その周十四米餘、高さ約三十米と稱せられ鎌倉八幡宮の前にある大銀杏と並び稱せられてゐる。

月影に銀杏を仰ぐ納涼かな　竹冷

清水あり加之（しかのみならず）大銀杏　霞峰

第十八　戰死軍人

古來花は櫻木人は武士、といふが、男子と生れて、武夫に召しいだされ、君の馬前に討死をするといふことほどの本懷はあるまい。吾が村からも、日清日露の大戰に參加して屍を滿洲の野に曝し、今は靖國の社に祀られて靜かに眠つてゐる軍神がある。之等の勇士は、日露戰爭の當時、敵が難攻不落と恃んだ旅順の攻擊に、第三軍司令官乃木大將の部下となつて働いたのである。

阿尾の松原金三郎と、北八代の船山淺次とは、明治三十七年十一月、二龍山の激戰に加つて、名譽の戰死を遂げたのである。

阿尾の四反田竹次郎は、一等喇叭卒として、明治三十八年三月、奉天の會戰に參加し、喇叭を手にしながら戰場の露と消えた。阿尾村の木口小平である。　指崎の扇浦勝三郎は、工兵となつて、明治三十七年七月、磐龍山や鉢卷山の攻擊に參加して坑道の作業中、西砲臺から飛んで來た敵の砲彈のために、花々しい最後をとげたのである。　阿尾の松原助松は、海軍水兵となつて、軍艦常盤に乘り組み、旅順要塞の攻擊に陸戰隊となつて、敵の堅壘を拔き、或は船艦を破りなど、偉功を立てたのであつたが、遂に軍國の花と散つたので、君の功績について滿洲軍總司令官大山大將や、第三軍司令官乃木大將から感狀を贈られてある。又戰雲が收まつて勇士が凱旋した時に聯合艦隊司令長

官東鄕大將から君の靈前に供へられた弔詞を讀んで見ると言々皆眞に迫つて知らず〳〵の間に涙を催すのである。

これら幾多の戰死軍人は、いづれも尊い血潮を流いて皇國發展のために人柱となつて下されたのである。　いつか先生につれられて、戰死軍人のお墓詣りをした事があつたが、當時の事を思ひ出されて自ら頭の下るのを覺えた。

明治天皇御製

國のため斃れし人を惜しむにも
思ふは親の心なりけり

第十九　氷見の詩

題字「永芳」は乃木大將の書

（晴　雨）

（一）太田の濱のいそ傳ひ、
　この岩崎は義經が、
　雨を晴せし舊蹟地。
（二）島尾の遊園右に見て、
　手向の社過ぎ行けば、
　朝日觀音堂近く。
（三）上るや石のきざはしの、
　右に聳ゆる大銀杏、
　問はゞや遠き世々の跡。
（四）神武の像に詣でては、
　永芳の二字かんばしく、

　乃木將軍も偲ばるる。
（五）呼ばは應えん唐島や、
　遠くにかすむ虻ケ島、
　ながめつきせぬ有磯海。
（六）眺望いよゝ開け來て、
　石動山の山なみに、
　續くや阿尾の菊池城。
（七）歷史は長し四百年、
　興亡すべて夢に似て、
　英雄の墓はいまいづこ。
（八）國泰光禪古寺の、

山門高き松風に、
昔の音やこもるらん。

第二十　森寺の西念寺

今から凡そ六百五十年前、淨土眞宗の開山、親鸞上人が、加賀の國、吉崎坊建立のため、その第四子連誓上人を北國へお遣はしになり、淨財を勸進させらるゝ事になつたのであつた。

はじめ、連誓上人は、石川縣能美郡鹿島村と稱する所にお寺をたてゝ、御化導になつた處、能越の善男善女が集つて、よく佛道に歸依する樣になつたといふのである。上人は更に進んで荒山峠を越えて越中の國に入り、今の八代村の吉瀧の地、高

木場と稱する所に一寺を建立されたが、しばらくすると山を下りて森寺村の地にお寺を移さるゝ樣になつたのであると、傳へられてゐる。即ちそのお寺が今の西念寺で、境内幽邃堂宇高壯で門信徒の數も多く、組内稀に見る古刹である。開基入寂されて既に六百年法燈脈々として傳はること二十三代、一鄕信仰の中心となつて今日に至つた。今お寺に傳はる寶物には親鸞聖人の御像、連誓上人の御文など得難いものがある。思へば吾が阿尾の村には、佛閣には、西念寺の如き、お宮には、箭代神社の如き由緒の深いものがあつて、村民崇敬の的となつてゐることはまことに力强いことである。

第二十一　朝日貝塚

國泰寺分院誓度寺の東の方小高い丘陵の上に史蹟朝日貝塚の標柱が建てゝある。　大正十四年六月、史蹟調査のため、このあたり一帯の地を發掘して尊い史料を得たのである。　數千年の昔、この地方に住んで居た所謂先住民族が山を獵つては猪や鹿を追ひ、海に漁しては海豚や貝類を獲り、その骨や貝殼を積んで山をなし永い間地中に埋れて居たものである。それより更に珍らしいのは先住民族が住つた住居趾とも見るべき粘土で固めた床と、小屋でも立てゝあつた樣な支柱の趾が發見された事である。　その住居趾の中に小石や土器の

（朝日貝塚）

破片で造つた圍爐裡が現はれ、幾千年以前に使用されたとも見るべき灰がそのまゝ埋れてゐたのである。　かゝる住居の遺跡は、全國稀に見る所で、忽ち學術研究の有益な資料となり、朝日貝塚の名は一時に有名となつたのである。この地方一帯からは石斧、石鏃、石棒、などの石器時代の遺物や、繩紋、籠目、布目等の、土器の破片がたくさん發掘され中にも、珍らしいの

は石で造つた庖丁や、鋸などが出たり、魚の骨でこしらへた縫針や、魚具の類が掘り出されたりしたのである。吾等の遠い祖先は幾千年の昔から生活發展のために苦心慘憺して今日の文化を造り上げたのである、と思ふ時、その發掘された一つ一つに向つて感謝の念を禁ずる事が出來ない。

第二十二　阿尾城

英遠浦に蠢々として突出する絶壁は、翠松碧波と相映じ曉の風微かに起る時、遠くに太刀の白雪を眺め、灘浦一帶の青黛朝靄の中に現はれ、自ら氷見の風光をなしてゐる。人皇第百代、御小松天皇の御宇、南朝の忠臣菊池武光勅命を奉じて九洲

武勝は武光七代の子孫

筑後川の戰に、足利の一族と力戰して利あらず、秋風落莫の身となつた。その子孫武勝東上して、伊勢の皇太神宮に詣でて武運の長久を祈り、遂に、越中の國に入り、始め二上城に居たのを天正四年阿尾の地をトして居城することゝなつた。

三洲志には、阿尾城は本丸長さ四十間、幅十五間、二の丸は縦四十間、横二十三間、とあれども今見るに地域明ならず、僅かに西側の斷崖に石壘の存するものがある。

されど、今猶上町、中町、浦町、御徒歩町など、稱する地名が殘り、上(かみ)の八郎右衛門、中町の六兵衛、浦の助左衛門など、當時の町奉行の家系は今も存して盛えてゐる。城跡の西北、凡五丁の所に今は田畑になつてゐるが、館(たち)と稱する所がある。こゝは城

主菊地氏邸宅の跡であるといふので、その附近には清水が滾々と湧き出る藤土手といふ所がある。これは城主の庭園の一隅で、當時藤棚を設け、茶亭を造つた所の名殘りであると、古老の言に傳へられてゐる。

菊地氏は祿一萬石を食み、兵三千人を擁し、富山城主佐々成政に屬してゐたが、慶長元年に廢城となつたので、その間僅に二十年である。城主武勝はその後、京都に上り紫野に入つて僧となつたといはれてゐる。

城跡はいづこか桃の花ざかり　秋石

第二十三　虻ケ島

虻（あぶ）　蛇（へび）

北の橋から灘浦航路の汽艇に乘ると、氷見の漁港や、唐島に白い漣を蹴たて、艇は勢よく北の方へと進む。乎布崎、垂姫崎など、萬葉の古を語る名所には、磯松が殆んど海面へとゞかんばかりに枝を垂れてゐる。松ケ崎の網の船には、四五人の漁夫達が裸になつて働いてゐるが、太陽の直射に照り映いて赤銅のやうに光つてゐる。やがて牛ケ鼻を曲ると夕陽に映えた虻ケ島が盆景のやうに現はれて來る。島の上には、古木鬱蒼と生ひ茂つて見るから常夏の國である。この島は、女良村姿の沿岸を去る凡二十餘町の所にあつて、寒暖二潮流をうけて、動植物の種類も多く、中にもトヤマノヂカヒ、オホヒナノウツボなどは珍らしいものだといはれてゐる。近年富山

（虻ケ島）

高等學校はこの島に臨海研究所を設けて、これらの研究に力を注いでゐる。

天正十年の頃上杉景勝の部將、井津木彈正が石動山天平寺の般若院を助けて、前田利家を攻めんがため、兵三千と戰艦數十艘を率ゐてこの島までやつて來たが、既に石動山が陷されたといふ事を聞いて歸り去つた。

今、中田村に、一夜城といふ所が

網（あみ）　綱（つな）

あるが、越後勢の先鋒が上陸した所であるといはれてゐる。

毎年夏の頃になれば、或は海水浴に、或は海産動植物の採集に、又は一日の清遊を試みんとして來集する人々が多い。今島の上には茶亭を設けてこれらの客を呼んでゐるが、島に憩ふて古木の下に腰をおろせば涼しい潮風が沖の方から吹いて來て、灘浦の山々に連る石動山脈はいふに及ばず遠くに見える阿尾の城、唐島など、又捨て難い趣がある。

第二十四　鰤大敷網

夏網が上るともう鰤網の岡仕事が始まる。網を合せるもの、俵に砂利を入れて錘をこしらへるものなど倉庫の前は毎

日網仕事で忙しい。かくて準備が出來ると十一月上旬に網下しをする。廣い海の事であるから十米や二十米はどちらへ延びても差支がない樣に思つてゐる人もあるがそんなわけにはいかない。漁場の免許は恰かも田畑の所有權と同じやうに一定の區域が定まつてゐるので少しでも他の漁場を浸害するやうな事があつてはならない。

網下しはなか〳〵困難な仕事で漁獲の高にも影響する重大な責任があるので多年の經驗ある人達が指導者となつて先づ海上に船を浮べて石動山や寶達山のやうな遠い所にある高い山を矯めて位置を定め魚道の方向や潮流の關係をよく考いて周到な注意を拂つて沈下さるゝのである。阿尾の

沖には前網、樽水の二統の鰤大敷網が下されてあるが、首尾よく網が下りると、やがて潮流に乘つて來る鰤の大群を心待ちに待つわけである。

網の構造は鮪網と同じやうに身網と垣網とからなつてゐる。垣網は大きな網目のおどし網であるが、鰤は先づこの垣網に驚き、之に沿ふて沖の方へ逃げようとして、身網の中へはいる。身網の中には返し網がついてゐて一度中へはいると、逃げ出る事が出來ない樣な仕掛になつてゐる。富山灣を始め三重縣、福井縣などに多く用ひられてゐる鰤網は上野式又は辻本式の改良鰤大敷大謀網といふのであるが、これらの網の改良については多年の經驗をもとゝして少からぬ苦心を拂は

れたものである。

一統の網には、二百人許りの漁夫が居るが、網が下りると毎日時を定めて網上げをする。寒い北風の荒ぶ中で、吹雪にふきまくられながら網をとる漁夫の苦勞は一方ではない。數艘の船を網の口に並べて、よいしよ〳〵の掛聲もいさましく、身網を一方から、たぐつて行く。だん〳〵網がとりつめられて、右往左往する鰤の脊すぢが見えて來ると、漁夫達はいよいよ勇み立つてくる。網の中がせまくなると、めい〳〵一挺づつの手鈎を持つて狂ひ廻る鰤を引きかけては、船の中へ引き上げる。見る〳〵うちに、船の中では、銀鱗光る魚の山が出來て大漁大漁の聲が湧き立つて漁場から市場まで運ぶ汽艇の

音も勇ましく、往復する。鰤は大抵三年目に、成魚となるので、一年子はコヅクラといつて夏の食膳にのぼり、二年子は福來魚と稱し、三年目に初めて鰤と呼ばるゝ樣になるのである。

第二十五　祇園祭

青田の路に續く人の波は皆氷見町へと急ぐ。今日は祇園のお祭である。學校がすむと友達二三人連とお祭を見に出かけた。もう池田町へはいると人ごみで歩けない日の宮の近くまで來ると、六本の太鼓台が威勢よく太鼓を打ち鳴し、紋付の羽織を着た御輿のお伴の人達が手に扇を煽りながら五六人づゝ、路の傍に立つて居る。お祭の行列の中には、鎧を着た

少年が籠に乗つて、舁がれてゐるのも、もの珍らしい。　北町六町の祇園祭は、昔は高さ十米もあるやうな、大きな立物をつくつて、曳き廻つたのでなか〳〵壯觀なものであつたさうだ。南町には十本の曳車がある。　太鼓に鷄、笹籠冬、金梅鉢など、思い〳〵の山車に布袋や劉備、廻轉人形など、趣向を凝らした人形を飾つてある。　丁度御座町のお宮まで來ると、向ふの方から祇園囃も賑かに、十本の山車が揃つて來た。　子供達は長い綱を曳いて、さも樂しさうに囃いて居る。　お宮の前は、輕業や、動物園などの見せ物が一ぱい建ち並んで、身動きも出來ない程の雜沓である。　お神樂はひつきりなしにあがつてゐる。

このお祭は、昔氷見町に惡疫が流行して、毎年多勢の病死者

が出たので、人心恟々とした。　そこで祇園の神を信仰して惡疫を除かうといふことになり、京都八阪神社の分神を勸請して、氷見町の總社としお祭を行ふた所、見事に疫病を除くことが出來た。　その御禮として、毎年盛なお祭が行はるゝ樣になつたといふのである。

ぎをんだ　ぎをんだ
朝から人出だ、　ゆかたの行列。

ならんだ　ならんだ
曳山十本　布袋に劉備。

殖（しよく）そだつ　ふやす
植（しよく）うゑる

人波　人波
日の宮神社に　手向の社に
ピーピー　シヤンシヤラ
ドン　ドン　ドン。

第二十六　殖林

「御苦勞さま」
「いゝ杉ですね」
「これは、日露戰爭の紀念に植えたのでもう三十年になります。」
さく〳〵と杉の下草を刈る鎌の音が聞えてくる。檜笠をか

むつた二人の會話がまだつゞく。
「私は山が好きで、朝飯を食べると來て、終日山を眺めて樂しんでゐますよ。」
「隨分廣い山ですが、どれ位ありますか。」
「五町歩位になりませう。山があちこちにとんでゐると、何かにつけて不便ですから、一ケ所に纏めたいと思つて、隨分苦心して集めたものです。」
「殖林は、主に杉ですね。」
「こゝは杉の適地です。檜や、檜も少しはやつて見ましたが、あまり發育がよくありません。」
「木の數はどれ程あるでせう。」

「二萬本はあるでせう。」

「大した數ですね。」

「二萬本の杉の木は、私の生存中には一本も伐らないつもりです。又一時に伐ると、後の手入が困難ですから、大きなものから一年に五百本宛間伐して伐つた後は、必ず補殖をすることだけは、子孫の義務として、よく言遺しておくつもりです。」

「それでは、二萬本の杉の木全部を伐るのに、四十年もかゝるといふ計算になりますね。」

「こんな、計畫を立てゝこれを實行すれば、永久の財源が出來る譯ですが、子孫のために、美田を買はず、といふ言葉もありますから將來は何とも計りかねますが殖林は一種の貯蓄ですね。今年苗木を植え込めば、年々利息がついて、幾年かのあとには元利合計の拂ひ戻が來るといふ譯ですよ。まあ農家の基本財産を造るやうな譯ですね。」

二人の話は、次ぎ〳〵と、とぎれない。此の山は日當りのよい南向きの所で、大きなのはもう電柱になる位なのが、鬱蒼と生ひ茂つてゐる。小さなものでも、私達の脊丈位にのびて、見渡す限りのび〳〵と心が立つてゐる。

第二十七　有磯海

明月を洗ふてすめる有磯海　布勢丸

汀に立つて、あの渺々として、果しなく鏡のやうに、すめる紺青の海を見入つてゐると、大自然の神秘の中にとけこんで、茫然と己を忘れてしまふ。　今し方、氷見の港を離れた灘丸は、白鳥のやうな船體を滑らせて、虻ケ島の方へ急ぐ。　目を轉じて遙か向ふを見渡せば、その昔、大伴家持卿が遊覽の時、富士の高根になぞらへたと、稱せらるゝ二上山や田子浦ともみなされた、島尾の海岸一帶の、白砂青松を、へだてゝ千古の雪を頂いて、巍然と聳え立つ立山の雄姿、自から仙境に遊ぶ趣がある。

有磯海の稱は富山灣一帶をさして云ふのであるが、又氷見の海岸のみを稱する事もある。　芭蕉が、

早稻の香やわけ入る右は有磯海

の句を作つたのは、今の放生津あたりで、音に聞く有磯の海に、愛着の情をのこしながら、俱利迦羅を越えて、加賀に入つたのである。

近年鐵道省が島尾の遊園地を經營する樣になつてから、越の潟や、義經の雨晴など、共に、夏季海水浴に集る人々は實に夥しい。

有磯は一に、荒磯とも書く。　秋風が吹いて避暑の客足が遠のく頃になると、遠くに海鳴の音を聞く樣になる。　そろ〳〵霙の降る頃ともなれば、逆卷く怒濤は岩を嚙み岸を打ち摧きもの凄い海神の荒れ狂ふ幾日かがつゞく事もある。

ちろろ

また、く　明星
北風　北風　荒れる

ひらら
鷗か　雪か
鰯か　鰯の　鱗

ほろろ
日暮るる　氷見町
有磯海　有磯海　荒れる。

第二十八　大境の洞窟

宇波村大境の東北海岸に、高さ四十米餘りもある、丘陵性の山脚が出入してゐて、その東北端は、「鵜止り。」といひ、昔大伴家持卿が鵜飼をされた所であると、傳へられてゐる。丘陵の上は、竹藪や畑地であるが、その西南面に入口の幅十七米、高さ六米、奥行三十五米の所謂、大境の洞窟がある。内部は穹隆狀をなしてゐて、その奥に進むに從つて、だん〳〵と狹くなつて、行止りの地底から、清澄な飲料に適する水が、チヨロ〳〵と湧き出て、奥天井よりは、鐘乳石狀のものが垂れ下つてゐる。

大正七年洞窟の入口に祀つてあつた白山社を改築せんが

（大境洞窟）

爲めに、境内を取擴めやうとして、地盤を堀下げ土塊を前方海岸の急斜面に、運んでゐた時、偶然にも一大石棒を始め珍しい、石器、土器、人骨等多數堀出され、村人の驚きは一方ではなかつた。此の事が、新聞紙に報導され、來觀する人々は、日に夜をつぐ有樣となつた。

間もなく内務省史蹟名勝天然記念物調査員が來村して、實地研究の結果、我が國では、未だ類例の

ない新奇な史蹟であると發表され、後斯道の專門家が度々、現地を調査して、大正十一年史蹟名勝天然記念物保存法によつて指定されたのである。

洞窟内は調査の結査六層に區劃されて、各層によつて遺物が異つてゐる。六層の基底部以下は砂層であり、各層の間は、落盤を以つて、境をなしてゐる外多少の土壤貝殼或は、木炭、灰等が挾まれてゐる。

此の洞窟は、大昔凝灰岩が、激浪の浸蝕作用によつて大きな洞穴を形造つたもので其後、幾久しい年月の間に、陸地は、だんだん隆起して、海浪の憂もなくなり、太古人は日當りのよい此の洞窟を住居として、或は山野に狩し、海邊に漁り、粗末な器に、

一日の收穫を盛つて安き、憩を求めたものであるが、落盤の慘害に會ふて住居は埋沒し、難を逃れた住民は此の地を見捨て退去しこゝに新しい洞窟となり、幾百年かの後また他の住民が來住し、落盤の慘害再三反覆されて、遂に時代の異る數層の遺物を見るに至つたものであるといはれてゐる。

斯くの如く、此の洞窟の各層に介在する遺物によつて、先史時代よりの人類進歩の跡を見ることが出來ると共に、我が國唯一の洞窟住居趾であるといふので、學界の至寶として、珍重されてゐる。

第二十九　天滿宮

天滿宮は菅原道眞公を祀る

青田を渡る朝の風が靜かに波うつてゐる、曝道を箒手に手に集ひ來る子供等、今日は指崎の神社掃除の日である。

一同寄集つて神域に入れば老樹鬱蒼と生ひ茂り言ひ知れぬ崇高な感に自ら襟を正さしめ、今までがや〳〵とさゞめきながら來た子供達も誰言ふとも、なしに聲をひそめる。鳥居に近づいて拜禮をしてから石段を上れば、三かゝへもあらうかと思はれる杉の巨木が雲つくばかりに茂つてゐる。

かの昔、宇多天皇の御代に藤原氏我儘を極め宸襟をなやまし奉つた時、菅原道眞公は學問も深く御德も高く政治の道にも優れてゐられたので藤原氏の妬む所となり、時平の讒言によつて遂に筑紫に流される樣になつたのである。しかも配

所にありてはいつも身を慎しみ門を閉ぢてひたすら學問に御心をおなぐさめになつた。たま〳〵重陽の節句に

去年今夜侍清涼　愁思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

詩を御作りになり寸時も君恩を忘れ給はなかつたといふ公の御德こそ、やがて天滿天神として祀らるゝ樣になつたのであらう。此の境内にあるきはだつて高い巨木こそ、かの御神體の尊嚴さを物語る如く思はされて、神々しさたとへん樣もなく、おのづから頭が下る。

やがて各々心をこめて箒を手に取り掃除にかゝれば、神殿の前の落葉や雜草はきれいに取り除かれて神域は淨められる。折から一筋の旭光が杉の巨木の間からすが〳〵しさうに差し込んで來る。のどかな朝である。この氏神樣に守られ平和な村に育まれてゆくことの限りなきうれしさを感じられる。思へば一千年前に生れてゐられた道眞公が今も猶吾等の心の中に生きて見守つて下さるゝのだ。こんな事を感じながら靜かに石段を下りて歸途についた。

第三十　二上山

二上山から出た月は、
むかしながらのまろい月

二上山へ照る月に、
鮒が跳ねるよ、布勢の湖。

二上山は馬の鞍、
いつやら、あの山、登てた。

二上山を、ほとゝぎす
卯の花こぼして飛んでつた。

二上山の轡虫
青茅の根に鳴きすだく。

青茅（かりやす）
すゝきに似た草本

二上山から出た月は、
むかしながらのまろい月。

（多胡羊齒作詩）

第三十一　大澤路青

阿尾村から元祿年間路青と稱する俳人が出てゐる。芭蕉の門人であつた美濃の人、路通に師事し、金澤の俳人北枝などと交際が深かつた樣である。さすがは一城の都であり、文化の中心を形づくつてゐた御城下だけあつて、學問技藝に於ても勝れたものがあつた。今路青の句を見るに、

提灯の灯さきに廻る蛙かな

相撲角力

相撲とつて叱られてゐる従兄弟どし

情味が豐で慈愛虫類にも及ぶといふ所さながら一茶の句を見るやうである。

氣がつけば夢の中にも時雨かな

人目には水の奉行で暑さかな

無理のない輕妙な表現に到つては後人の追従を許さない。

親達もいはれし伊勢の茂りかな

案内者や扇ひらいて和歌の浦

など見れば俳行脚に出でゝ詩嚢を肥やすことを忘れなかつた。

村々の境なるべしそばの花

落ちさうな雷雨や木瓜の花

靜かな一幅の繪を見るやうな感じは蕪村の趣がある。

ほとゝぎす都の歌のよみあまり

叱られた咄や伯父の大根ひき

などの手法の妙におどろく。

昭和九年の秋、この郷土が生んだ俳匠のために同好の人々相集つて句碑を建て、

叩き手は居ますごとやに納斗汁

の一句を刻んだこの句は路青が蕉翁の十三忌に手向けられたものであるといふ。俳句は僅か十七文字の短かい詩ではあるが、一句よく人口に膾炙されて後世に殘る文學の力を

否むわけにはいかない。

第三十二　荒山峠

遠近の山々が錦を飾つて、恰かも吾等をさし招いてゐるやうである。一日能越の國境にある荒山峠の桝形山に登山を試みた。路の兩側は稻架が立ちならんでトンネルの中をくぐるやうな心持がする。朝露をふんでいそ〳〵と行く足もまことに輕るい。吉瀧の葉櫻を通り過ぎればまもなく磯邊に着く。八代川の溪流に沿ふて縣道を辿ること凡そ四粁ばかりで小瀧に着いた。左に千仞の谷底のせゝらぎの音を聞きながら、行手をさへぎるかのやうに思はるゝ山嶺を右にして爪先上りに行けばやがて眼界急に開けて青々と水を湛える湖水を見る。こゝは有名な國見の地、辻地帶である。遙か北方を眺むれば能越の國境、石動山脈が蜿々と起伏して、吾等の一行を迎へてゐる。中にも一きは高く其の狀、恰かも桝を伏せたやうな峻嶺の聳え立つのが眼につく。これが即ち桝形山である。荒山峠は其の左手の凹所を越えて、一路、能登平野を目かけ、釣瓶落しに下るのである。廻りくねつた山路を右にとり、黄に紫に彩る木の間を過ぎゆけば暫くして、桝形山の頂上に達する。山上は平坦で僅かに城壘の跡を殘してゐるが、四方の展望はまことに心地よい。秋の空は碧玉の如く晴れて、眼下に見下す七尾灣は鏡の如く澄み渡り、能登島から

奥能登の連峰は一望の下に歴然と指呼することが出來る。

歴史の傳ふるところによれば天正五年上杉謙信がこの桝形山に塞壘を築いて七尾城主畠山氏に備へたといふ時會々中秋の十三夜にあひ、月光玲瓏として秋色清爽なのを見て、謙信はかの有名な一詩を作つた。

霜滿軍營秋氣清　數行過雁月三更
越山併得能洲景　遮莫家鄕懷遠征

英雄の胸中を偲び徘徊すればそゞろに天嶮の名城であることを偲はしめる。

折から夕靄の中にひゞき渡る七尾港の汽笛にうながされて歸途についた。後をふり顧みれば、今し方登つてきた山城

の空に、月影淡く頰笑で吾等を見送つてゐた。

第三十三　産業組合

大きな倉庫の前に阿尾村産業組合といふ看板をかゝげてある。春の肥料の購入期になると、村々へ配給するのになかなか忙がしさうである。秋になると農家は收穫した米を俵裝して、一先づ組合の倉庫に預け入れて、共同販賣をするのである。一口の出資金が三十圓で阿尾村の人は一口以上の出資をすれば誰れでも組合員になることが出來る。組合の販賣部には農家に必要な肥料、農具の類は勿論醬油、鹽、砂糖、衣服、等すべて日用品を販賣する。貯金部には組合貯金、家族貯金

などを設けて勤儉貯蓄を奬勵し、生産の資金を要する人々には、低利で資本の融通を計ることになつてゐる。又利用部には共同作業場を設けて電力を應用し、精米、籾摺、藁打、製網などの作業をすることも出來る。その他、藁莚、繩、網、木炭、竹材等の生産品を共同出荷して可成生産者の利益を保護することに努めてゐる。

近時の産業機構は大同團結して個人の利益を本位とせず、一村の共同利益を計るといふ精神に基かなくてはならなくなつて來た。そこで同業者の團體を結び、斯業の發達を計らねばならぬといふので、種々の組合が出來るのである。漁業組合、養豚組合、木炭組合、藁莚組合、など一々枚擧に遑がない。

産業組合は單に一村の組合に留るのでなくて、府縣にはそれ〴〵聯合産業組合が組織され、更に全國聯合産業組合が出來てゐる。中央より地方に至るまで一糸亂れぬ産業組合網が張られて、立派な統制がとられてゐるのである。吾等は村の産業組合員となつてよく之を利用するやうにし、組合精神に基いて健全な發達を計らねばならない。

第三十四　俳句と和歌

これは郷土の人々が地方の風景を歌つたものである

肱まくら春風きくや布勢の山　左琴

椿咲く林にくらき古墳かな　秋石

春風の入江横切る眞帆片帆　月弓

鶯は臍の下から初音かな　路青
とうとさや岩を根にして木の茂り　文哉
笑ふのもうて、小凄き洞の内　茶翁
しら〳〵と海原ひろし雨の月　湘月
晴れてゆく霧の輕さや磯馴松　月弓
幾寢覺しても千鳥の鳴く夜かな　湘月
ひまのある身が夜な〳〵に鳴く千鳥　路青
二上の裾野や雪の朝ぼらけ　湘月
松風や田の畔はしに殘る雪　路青

初聲を一聲立て・二上の

山の尾の上の夕空の月　瑞穂
暮の夜の雨は靜かに唐島や
岸うつ波の音さへもなし　同
三角山に影やかくるとひ來れば
月照る空にほとゝぎす鳴く　同
眞帆かけていさかへり見ゆ海人の
名もあらいその波高くして　同

第三十五　國泰寺

醍醐天皇の六百年祭が勤まるといふので、先生につれられて西田の國泰寺にお詣りした。高岡往來を左へ折れると山

創初

（國泰寺）

を堀り割つた新道があつて、しばらく行くと青々と生え茂る老樹の中に山門が見える。門の左右には大きな仁王さんが突立つて逞しい肉骨を見せてゐる。法堂、禪堂、開山堂などの伽藍が高く摩頂山の空にそびへ、老松の枝ぶりも面白く、見るからに臨濟宗大本山としての舊い歴史を物語つてゐる。このお寺は後醍醐天皇の勅願寺として、慈雲禪師が創めて

開かれた北國鎭護の靈場である。禪師は文永十一年信洲に生れ幼い時、兩親を喪ひ十二歳の時越後の國五智山に登つて、薙髮得度をされだん〳〵修業を積んで一代の大德となられ、天皇の御信任が大へん厚かつた。天皇は態々勅使を遣はして禪師を京都へ召させ給ふた。天顏殊の外麗はしく皇后の御手づから天皇の御衣を以て袈裟をお縫ひになつて之を禪師に下し賜つたといふ。

今摩頂山の中腹に木間がくれに御醍醐天皇の木像を安置されてある天皇殿が見える。明治十一年の秋、明治天皇、北陸御巡幸の時扈從して來た山岡鐵舟は、當寺を訪ねて天皇殿修理のために自ら一千二百双の屏風を揮毫して勸進の資に當

てたと聞く。寺を創めて六百餘年時勢の推移に從ひて隆替は免れねど、法燈燦として相繼ぎ今日に到つたことを想へば、聖恩の宏大を感ぜぬわけにはいかぬ。

第三十六　齋藤彌九郎

幕末の偉人齋藤彌九郎先生は、氷見郡佛生寺村に生れた。或日、寺小屋からの歸りかけに、西の山端に落ちてゆく夕日を眺めながら、

「人と生れては志を立てゝお國の役に立つ樣な立派なものになつて見たい。」

としみ〴〵感じた。

十六の時單身江戸を見かけて、鄕關を出た。途中の苦心はいふまでもなく、或は地藏堂に一夜を明かし、或は固い握り飯をかじり、などして漸く江戸に辿りついて、或家に仲間奉公をするやうになつた。元より大志を抱く彌九郎は、晝の仕事を忠實につとめ、夜は讀書や劍道に夢中になつて修業につとめてゐるので、主人も大いに感心して、遂に岡田十松といふ劍道の先生について武藝の修業をする事になつた。その後二十年の苦心が報えられて岡田先生の歿後門人一同から薦められて九段坂に練兵館を開いて恩師の後を繼ぐ事になつた。かくて彌九郎の名聲は一時に高まり、門を訪ねて敎へを乞ふ者もつぎ〳〵と多くなつた。

一日水戸齊昭公が彌九郎を招いて、銃劍槍三隊を率ゐて、新式の兵法による對向演習の樣子を御覽になり、公は激賞して、

「かくの如く精鋭なれば外敵憂ふるに足らず。」

と申され「報國」と書いた自筆の額と、刀劍を下賜された。

先生は單に劍客であつたといふだけでなく、よく時勢を達觀して、大義名分を明かにし、尊王攘夷を說いて國士の面目が躍如としてゐた。かつて幕府は江戸灣の防備を江川太郎左衛に命じた時も、先生とは岡田門下の交誼があつたので、大いに助け合つて國防の任に當つた。又明治戊辰の役に、官軍は三道から江戸へ攻め上つた時、幕臣池田大隅等は上野に立てこもり、官軍に手向ひ彌九郎先生を招じて加勢を乞はんとした。先生は容を改めて曰く、

「老父何すれぞ王師に叛かん。武士たる者は宜しく順逆を知るべし。」

と大聲叱咤して、大いに尊王の大義を說いた。果して彰義隊は敗れて江戸は東京と改まり維新の大業はなつた。明治二年大阪造幣局に出仕した時、たまたま出火に際して責任感念の强い先生は、齡、既に七十を越えた身をも顧ず火中に飛び込んで、重要書類を取出し大へんな火傷を負ふたこともあつた。かくて再び東京に歸り、明治四年十月、七十四を以て長逝された。今小石川昌林院に葬つてある。

思ふに先生は、北陸の寒村に生れ、大望を抱いて江戸に出て、

先生の遠祖は藤原魚名であるといはれてゐる

文武の兩道に精進して、德を積み遂に子弟の敎養に勵み、練兵館から幾多の人材を輩出した。中にも木戸孝允、山尾庸三、渡邊昇、楠木正隆、の如きは皆明治維新の大業に參畫して、國家の柱石となつた人々である。故に先生は、勤王の大義を明かにして一世を風靡された、我が鄕土の先達である。今先生の風丰を偲ぶに眼光烱々として底に光り筋肉逞ましく見るから に偉人の相貌がある。天資孝友にして膽大果決、實に日本武人の典型と見るべき所がある。明治四十年五月、誠忠天聽に達し、畏くも從四位を追贈され、今佛生寺村の鎭守森に碑を立て贈從四位齋藤篤信齊翁之碑と記してある。當に天恩枯骨に及ぶといふべきである。

第三十七　氷見町

氷見町は人皇四十四代天正天皇の養老年間に、大野村の一住人が信濃の濱に家を構へたのが始まりで、その後、年と共に人家も殖えて、三百餘戸の一村を形づくる樣になり、之を日見と名づけたといふのである。もと日見は朝日を見るの意味で、その頃は今の日の宮神社のすぐ前まで入江になつてゐたので、海から昇る朝日をよく拜むことが出來たといふ。ところが、その後しば〳〵火災が起り、日は火に通ずるから、火を見ることが多いのだといふので、町名の改正が問題となり、今の氷見に改めるやうになつたと、傳へられてゐる。

（氷見漁港）

氷見町は今や人口一萬五千餘氷見郡の中央に位し、東には有磯海を抱き、西に朝日山を控へ、南には二上山を、北には石動山に連なる山脈が走り四圍の眺めも頗るよい、有磯の海からは春は鰤、夏は鮪、秋は鰤と、年中の漁獲物は、絶え間なく、その殆んど全部は氷見町に集り、殷盛を極めてゐる。昭和二年國庫から五十萬圓の補助金を仰いで漁港を完成し、今や全國に

於ても、有數な漁業地として、知らるゝやうになつた。

明治四十五年始めて、氷見線を敷設されたが遠からず七尾線と連絡することになつてゐる。道路は氷見を中心に扇狀をなして、四通發達してゐる。銀行、會社、警察、郵便局等の諸官署を始め、中學校、女學校等の敎育機關も備はり、經濟、文化の中心をなしてゐる。

氷見は、又觀光の地として、廣く世に知られてゐる。わけても朝日山公園の眺望、唐島、虻ケ島の遊覽、島尾、雨晴の海水浴は、いふに及ばず、朝日貝塚十二町灣の鬼蓮等の史蹟天然紀念物にも富み、遊覽の客は四時絶えない。嘗ては富山縣の北海道といはれてゐた氷見も、今は北陸の樂天地として、天下に知ら

るゝやうになつてゐる。今後益々産業に、教育に、交通に、目醒しい發達を遂げてやがては、附近の村落を併合して大氷見を建設し、地方文化の開發に盡すやうになるのも、遠い將來ではあるまい。

第三十八　我等の學校

昔は寺小屋で讀み書き、算盤を習つたのであつたが、明治五年に學制が發布されて、邑に不學の戸なく、家に無學の人なからしめるといふ、明治天皇の有難い御思召によつて村々に學校が出來る樣になつたのである。わが村でも明治六年に願生寺を借つて、藪田村と共同して、阿尾小學校といふのを開校

（我等の學校）

する樣になつたのである。當時先生は僅かに一人であつたが、だん〳〵兒童の數も殖える樣になつて來たので、明治十六年に二階建の校舍を新築したのである。

同二十四年には、教育勅語を御下しになり、同二十六年には、陛下の御眞影を御下賜になるといふので、人々が村端れまで、お迎ひをして、盛んな奉戴式を擧げたといふことである。

時勢の進運と、兒童の增加に伴ふて、校舍もいよ〳〵狹くなつたので、新築について協議を重ねたが、種々の事情のためになか〳〵渉らなかつたが、大正三年の春いよ〳〵、新築の議がまとまつて工事に着手したのである。　ところが、同年八月二十九日、おそろしい暴風雨が襲ふて、工事半の校舍を一夜にして、吹き壞してしまつた。　その時の兒童の悲しみは、いふに及はず、村民一同悲歎にくれたのであつた。　しかしこれ位の事に心を挫くことなく、再興を期して、十一月十一日輪奐の美備はる新校舍が、巍然として建ち上り、盛大に新築落成の式が擧げられたのである。　即ちこの日を、我が校の創校紀念日と定められたのである。　校舍の新築と共に、內容もいろ〳〵改善

さるゝ事になり、大正七年には初めて高等科を併置されるやうになつた。　然るところ、大正十四年三月夜半の警鐘ものすごく、類燒の災厄を蒙つて、雨天體操場を殘して本館全部を烏有に歸したのである。　四月から入學の喜びを樂しんでゐた新入生等は學校を失ふて、唯茫然としてゐたのである。　村民の心痛はさる事ながら、幾度も協議を重ね、いよ〳〵復舊工事に着手したが、この時村出身の、東京、樺太、北海道などに居る成功者から工費の寄附を申出でられ、これと相呼應して、村內有志の寄附も、次々と出來るやうになり、工事はいよ〳〵進捗して同年十一月一日落成の式典をあげるに至つたのである。

吁思へば我等の學校よ、その誕生から今日に成長するまで

實に多難の生涯であつた。人々の愁と、誠とによつて今日あるを得た事を忘れてはならない。然しまた創立以來七十年の永き間、倦まず、弛まず、育英の業にいそしみ、わが阿尾の村に現存する二千人餘りの人々は、大方一度は、この校舍に入つて、教養を受けたわけである。又幾千人の卒業生は、或は、樺太に、或は南洋に、或は滿洲に地球上至る所に活動してゐる。こんな事を思へば、我等の學校は全く一村文化の中心となり、國運の發展に力を致して居る事を喜ぶべきである。

第三十九　郷土の人物

吾等の郷土は、山紫水明の地である。古來この風光明媚な

山水に、育くまれて幾多の人傑を生んでゐる。かの山村に呱々の聲をあげ、大志を抱いて、江戸に出かけ、幾多憂國の志士を養成し、明治維新の大業を翼賛し奉つた、齋藤彌九郎の如き、或は僅かの旅金を懐に、懐しい故山の月を後にして、一ばい一錢の氷水屋から巨萬の富をつくり、日本郵船會社の社長として、財界に雄飛した淺野総一郎の如き、何れも身を卑賤より起いて奮闘した立志傳中の人物である。

樞密顧問官、南弘の如きも、吾等が郷土に生れた偉人である。仰ぎ見るこの三人は正しく吾が郷土が生んだ偉人で、一は勤王の志士であり、一は財界の巨人であり、一は官界の大人物で、郷土の三傑と稱してもよい。これ等の偉人こそ、後進青年の

血を湧き立たせ、永久に無言の教訓を垂れる人々である。

その他郷土の開發に力をつくし、人知れぬ苦闘をつゞけた幾多の人士のある事を忘れてはならない。矢崎嘉十郎は當時十二町潟の湖水が氾濫して周圍の農村が大層苦しむのを見て、疎水工事を起して、排水を完成し附近の農民に多大の利益を與へ、藪田村に生れた、藪波淨慧が僧籍にありながら、常に養蠶をすゝめ、二毛作や馬耕を奬勵して、殖産の道を説いて、國利、民福を計り、或は義民霜右衞門が三年の凶作にあひて、年貢米の上納に苦しむ女良村の農民に代り己の一命を捨てゝ藩主に訴へるなど、皆それぞれに涙ぐましい郷土建設の人柱でないものはない。

當時の射水は今の氷見射水をいふ

第四十　郷土の發展

阿尾城址の東側海に面した、斷崖に數箇の横穴がある。これは、數千年以前に先住民族が穴居生活をした遺跡である。當時の民族が、使用されたといはるゝ石器や土器の破片が今もなほ、畑の中から掘り出さるゝ事がある。一千七百年の昔には襲津彦之命が、八代の庄に屯して射水を治められた事もあり、大伴家持が、越中の國司として、しば〳〵阿尾の浦に船を浮べ、風雅の道を娯しみながら地方の民情を視察された事もあつたのである。又戰國亂世の頃には、阿尾城、森寺城を築いて、地方の中心勢力となり、御城下町をこしらへてゐた事など、

思ひ起せば吾が郷土の今日に至るまで、幾千年の年月と、幾多の人々が絶えて止まない努力を續けて來た事を忘れてはならない。

されば郷土の一木一草といへども、吾等が祖先が苦心の賜で、いふにいはれぬ懷かしさを感ずるのも故ある哉である。

古來故郷忘れ難しといひ、或は故郷に錦を着て歸ることを、人生無上の快事とされてゐるのである。この麗はしい郷土愛敬の情念は、吾等日本人の持つ國民的感情として尊ばれて來て居る。骨を埋づむる豈墳墓の地のみならんや、と稱し雄心勃々として郷關を出づるものあるが、寧ろその多くは郷里に踏みとゞまつて、骨を埋める土地である。故に郷土は、唯わけもなく愛着を感ずるので、郷土は一種のインスピレーションである。

わが敬愛する郷土の青少年諸君よ諸子は青雲の志を抱いて、遠く海外に雄飛し、祖國のために力を盡すといふことも、元より賞讃すべきことであるが、又なつかしい郷土に踏み留まつて幾千年以來、我等の祖先が築き上げて來た、この麗はしい郷土を今一層よりよき郷土たらしめるために、各々、分に應じて力を盡し、相愛互助の精神に燃える理想郷を、建設することを決して忘れてはならない。

（終）

終

7r-4G-24